

中小企業の魅力発信に関するセッション

【講演2】「一人ひとりを大切にする職場（1）（ワーク・ライフ・バランス）」

有限会社モーハウス 広報CSR担当 宍倉 千代

私、モーハウスの宍倉と申します。今日は、代表が来られずに代理で来たのですみません。さて、この代表、経歴を見ると、茨城大学特命教授や様々な委員などいろいろと書いてあります。3児の母とありますね。2人女の子がいて、その下に男の子がいて、3人のお母さんなのです。次女が0歳のときに起業しまして、長男、一番最後の子ですが、出産しながら有限会社として法人化をしました。そういうとすごくパワフルな女性かなと思うのですけれども、すごくおっとりした代表で、うちのスタッフたちみな、この代表が大好きなのです。

私も含めてなのですが、子どもが生まれてから、この会社に入ってくるという人間が多いです。98パーセントくらいが、そういう感じで入ってくるという、お母さんばかりの会社です。なぜ、こんな会社がこのような場で登壇できるのかなと、皆さん、お思いだと思いますが、この一人一人を大切にする働き方、そこを見ていきたいと思っています。よろしくお願いします。

先ほどの代表が起業したきっかけなのですが、実は本社は、つくばにありまして、代表の自宅もつくばにございます。ゼロ歳児の娘と、その上の子を連れて、東京のお友達の所に遊びに行ったそうです。ゼロ歳児の子が、大体そうですね、つくばからバスに乗って、東京駅について中央線に乗って、そろそろ着くかなという頃に、おなかがすいて泣き出しました。それで、あやしたり、何とかしようとしたのですけれども、おっぱいで泣いているのが、分かったのです。だけど、ここでおっぱいをあげるのはできないなと思って、相当泣かしてしまって、もうしょうがないと思って、前のボタン、皆さんシャツを着ていらっしやると思うのですけれど、シャツを開けて、そこでおっぱいをしたそうです。

そのときに、どうしても、やはり、すごく恥ずかしい思いをして、どうしてこんな思いをするのだろうと思ったそうです。そこで、もしかしたら、これは、みんなが感じていることで、女性が外に滑脱できないのは、こういった何か問題があるからじゃないか。お母さんたちが外に歩いていないのは、こういう問題があるのではないかと思ったところで、こちらの授乳服を作るようになりました。

今日、私も着ているのですが、ここに、こう、スリットが開いて、肌が見えずに、赤ちゃんにおっぱいをあげられるというものです。胸が見えない、肌が露出しなくて、1秒で赤ちゃんが飲めるというものです。飲めただけではないのです。終わった後、サッとやるだけで、今、私もそうなのですが、パッとやっただけで穴がふさがります。なので、すぐに赤ちゃんにおっぱいをあげられて、次に動作もしやすいというお洋服です。私たち

の主な商品というのは、こちらの授乳服になります。

テーマ1に移らせていただきます。

私たちも含めて、「子育て中だからできること」というものを感じて、業務に当たっています。今、こちら、白と黒のスマホのカバーが出ましたけれども、モーハウスのモーというのは牛さんではなくて、お母さんの、mother の mo を取ってモーハウスといいます。今、白と黒という生き物で、パンダも、ちょうど赤ちゃんを産んだところで、どうもシンシンちゃん、夜中の授乳で、ご飯も食べないで、夜中も起きたままで、ずっと不眠不休で子育てしていますというニュースがあって、それを聞いた、絶賛子育て中、授乳中のお母さんたちが何と行ったか、Twitterで。「シンシンはいいね。眠れないだけでニュースになって、大変だねって言ってくれる。私たちいつもそうなのに、なんでパンダだけ言うのだろうね」と言うお母さんもいました。こういうツイートが出るぐらい、実は、子育てって大変だということがまん延しているのです。

筑波大学で代表が講義をしたときに、「妊娠、出産、つらいと思う人。手挙げて」としたときに、8割か9割ぐらいの学生さんが手を挙げたそうです。次に「子育て大変だと思う人」と言ったら、この人数、ほぼ100パーセント手を挙げたそうです。出産は無痛分娩もあるから、もしかしたら、やり切れているかもしれない。ただ、子育ては長いし、大変だし、お母さん、つらそうな顔をしているしというふうに、学生さんたちは、みんな手を挙げたそうです。

私たちも、こういう状況を見て、これだとやはり、妊娠、出産も、子どもを持つと思えない社会になってしまうのではないかと。実際にこうやってググりました。(検索画面の結果画像を見ながら) 母乳育児、子育て、育児不安という、すごい、いろいろ怖い話が蔓延しています。母乳育児なんてつらいとか、痛いとか、そんな話しか出ないです。つまり、子育てというのが、すごくつらくて、キャリアを形成するためにも、私、頑張って企業に勤めて、でも、自分も子どもを欲しいしと思うと、何となく子どもを後にして、という方も出てきてしまう。もしくは、キャリアも考えられずに不安な思いをしている学生さんが多いのではないかと思います。私たちは、こういった状況を、何とか打開したいと思って、こういった公共の場での授乳について、一石投じさせていただきました。

今年の年始です。1月11日に朝日新聞の窓のコーナーで、ある大学生の女の子なのです。投稿したのです。自分がアルバイトしているところで、いきなり授乳し始めたお母さんがいたと。あれはとっても迷惑だと。そういうふうに投稿してしまったのです。そうするとそれに対して、みんな、周りの人たちが、いろいろ賛否を出してくるのです。賛成は、赤ちゃんが、おっぱいをあげるのは、どこでもあげてもいいのではないかという方もいるし、やはり恥ずかしいことだから、それはちょっと大人としてのマナーにならないのではないかとだったり、そういう賛否両論で、あげればいいのかという人と、やめたほうがいい、子どもが小さいうちは、外出を我慢すればいいと、すごく論戦になったのです。

私たち、それを見ていまして、いや、授乳していても分からない、ただ抱っこしている

ようにしか見えないお洋服があるのだから、これを使えば、これに投稿した方も、もしかしたら気付かないで、授乳していたなんて分からないで済んだのに。こういうツール開発したのに、なぜ使ってくれないのかなとは思ったのですが、これをずっと繰り返しているのです。お母さんが外に出ること、それが何となく駄目なことというふうに、メッセージになったり。お母さんがこういうものを見たり、妊娠中の人がこのものを見ると、外に出ると、そういうふうにはバッシングに会うのだと思ってしまって、だんだんだんだん社会に、子連れのお母さんが見えなくなってしまう。そうなる余計、何だろうな、そういう出掛けにくい社会になってしまうのではないかという問題を、提起させていただきまして、それが、あちらこちらのニュースサイトにも取り上げられました。

今ここに、実際に授乳しているところ、こういうふうにしていただいているのではないかと、いうところを画像で出しました。ただ、ここで、すごい問題だなと思ったのは、私たち、こちらの授乳服を作り始めて、今年で20年になります。20年、ずっとこれをやり続けていたのです。お母さんが外に行っても、肌を露出しないで、周りに気を使われないような、自分も気を使わないようなお洋服を作って、お母さんが外に出て、子育てを楽しみましょうよというのをずっとやっていて、20年間やっていますが、今年の1月、こういうのが出てしまったというのがあります。

そこで、私たち、考えているのは、子どもを連れて社会に出ることによって、社会が子どもに慣れてくるのではないかと。授乳服を使って、授乳がしやすい、ただの便利グッズではなくて、社会をこうやって変えたいというところのベースがあります。その評価を、あちらこちらでしていただいているのですけれども、一番評価してもらっているのが、学生さんです。こういったお話しをすると、キャリア教育のほうで代表が講演をしたり、私たちも、ワークショップで学生さんに会うことがあるのですけれども、その学生さんが、この私たちの授業を受けた後に、「女性が働きやすい社会をつくっていくほうに、行ければいいと思います」というレポートまで書いていただいています。実際に、将来どうなるのだろうと、思っている人が、将来こうでもいいのだという働き方、そういうものを提案しているからこその回答だったと思います。

では、その働き方のお話にいきたいと思います。テーマ2「一人一人を大切にできる職場とは？」こう言うと私は、すごく大切にされているような感じはするのですけれども、きょうも代表から、かなりむちゃ振り、300人ぐらいの前で話してこいというので、相当、上がっておりますが、代表は、こういうのに、ぽんっと出してしまうのですね。「行ってきて」と。私も本当に、お母さんになって、この会社に来て、こういうことをするようになったのですけれども、そういうチャンスを与える会社でもあります。

ただ、そのチャンス、実は、こういった評価もいただいています。AERAさんに、『「女子限定職場」働きやすいか』最後にモーハウスとあるのですけれども、その上の二つがすごいのです。セブン-イレブン、ユニクロ、こんな大きい会社と比較されるとは、思いませんでした。さて、どういう働き方かといいますと、私たちは、出産、育児中、今、保活の問題

で赤ちゃんが、預け先がないなんていう中の、出産したてのお母さん。子育てスタートのお母さんが働き続けるために、ある工夫をしています。

それが、よくある保育所ではないです。ベビーシッターがいるわけではなくて、赤ちゃんと一緒に子連れで働くという働き方を取り入れています。これは私も利用しました。娘が3歳直前になるまで、毎日のように青山ショップに子どもを連れて、接客させていただいていました。実際にどうなのかというと、こんな感じです。これが、デスクワークでパソコン操作しているのです。これ授乳中です。つくばの本社の近くにLALA ガーデンというお店があるのですが、そこでもこういった、子どもを連れて働いています。こちらがお客さんで、こちらがスタッフです。あと、商品開発も、ここにいる女性は青山ショップの店長なのですが、授乳しながら、「いや、これちょっと、授乳しにくいんじゃない」とか、「この生地のほうがいいじゃない」というのを実際に試しながら議論しています。

授乳機能を、使いやすさというのを、すごく気にして、あと、赤ちゃんの顔に近い所にあるものなので、柔らかいもの。しかも、赤ちゃんって、すごく汚すので、汚れに強いもの、すぐ洗えるもの、そういった視点を取り入れています。そういうのも、やっぱり、子連れで働いているからこそ、見えるというものでございます。

で、つくばだけかということ、12年前に、東京、青山にお店がありまして、今も青山で、頑張ってお店を営業しております。こちらのスタッフ、今、第2子、子連れ出勤しておりますので、ぜひ会いに来てください。子どもを連れて、こうやって接客すると、いいことが二つあります。スタッフがすごく元気です。そして、もう一つ。来るお母さんたちも、こういう青山という所に、子ども連れて行っていいのかって思っている人もいます。だけど、いや、働いている方もいるぐらいなのだから、来てくださって言えるのです。そういうことで、来るお客さまも、働く側も、すごくハッピーな職場かなと思います。

これが実現するのも、私たちの主な業の授乳服があるからこそだと思っています。よく、授乳室というのが造られていますが、この授乳室、本当に完璧に整備をしようとする、かなり公共トイレぐらいにたくさん造らないと間に合わないと思います。でも、これを着ていけば、どこでも授乳ができるので、ウェアラブルな授乳室と、私たちは呼んでおります。

最後、テーマ3「地方だからこそ、中小だからこそ」に移らせていただきたいと思えます。これは、2011年3月11日の東日本大震災の後です。茨城も被災地となりまして、私たちの倉庫もかなり被災しました。物流が止まってしまって、1カ月ぐらい発送ができないということもあり、風評被害も相当ありました。茨城は原発事故現場が近いという風評被害があり、すごくつらいときもありましたけれど、1年後ですね。六本木の東京ミッドタウンという所で、東北デザインマルシェに呼ばれて、そこで、授乳ショーをしました。こういうこともパッとできるのも、さすがに中小だからなと思います。

そう、3.11のときも、本当に1カ月くらい、お客さまに普通に商品が発送できないのではないかと、お届けできないのではないかとおりましたが、代表が「今日、この時点で、

もう、出産して、モーハウスの授乳服必要になっている人がいるかもしれない」、「止めちゃいけない」、「どこでお産があるか分からない」と。「災害が起こっても、おっぱいや出産は止められないから、何とか発送しよう」ということで、青山ショップから頑張って商品を発送したり対応しました。そういう意味では、あのときにもしかしたら、私たちユーザーから、この業務に携わっているスタッフがいるから、その緊急時に対応しなければという思いがわいたと思います。こういう中小だから、小さい企業だから、よし、チャレンジして、少しでもいいから続けようということができたのかなと思います。また、こういった新しいことにも挑戦できるというのも強みです。

あと、多様な、「多様性の担い手としての「地方」」という面があります。東京で、代表も最初、就職したのですけれども、結婚を機につくばという、ちょっと地方に引っ越しまして、いろんな友達ができて、いろんなことにチャレンジができる土壌があったそうですね。そこで、いろんな、そういう意味では都会ではないネットワークをつくって、地方だからこそできる、起業ができたと言っています。なので、私たち、中小企業で、地方でというと、わりといろいろハードルがあるのかなと思いきや、実は魅力ある人材も確保できたりもするので、地方というのもいいかと思えます。

地方の良さというのは、茨城県というのが、住みたい街、ワーストワンというのを、3年連続取っているのですが、イメージアップ戦略として、子育て支援に力を入れていて母子手帳と共に授乳服のプレゼントを取り入れていただいたり、私たちの授乳服をアピールする助成金も頂いたり、手厚いことをしていただいています。

地方だからこそということで、もう一つ。京都府で、子連れ出勤のシンポジウムを開催したりしました。東京で一生懸命、青山でお店をやっている、何とか東京都でも、なにかやってもらえないかなと思っていたのですけれど、京都のほうで子連れ出勤のシンポジウムをやって、地方だからこそ、いろんな働き方を、取り入れないと、人材確保が難しい。いや、もしかしたら、地方だからこそ、いろんな多様な人材を確保できるのではないかといいところで、子連れ出勤を、スタイルをどんどん広めようというシンポジウムに登壇させていただきました。

こういった活動が、グッドデザイン、キッズデザインにも評価していただきまして、グッドデザインは2010年に最初にいただいて、2015年には2回目を受賞させていただきました。これは、このお洋服がかっこいいからとか、機能性がいいからって、そこもあるのですけれども、女性のライフスタイルを変えるデザインであるというところを、評価していただきました。ただ、皆さん、ずっと私、見えない見えないと何回も言いましたが、多分、8割程度の方が、本当に見えないのだろうかと思われているかと思うので、こういった動画をお持ちしました。先ほど、出てきたものなのですから。

(動画放映)

「普通、泣いたら乗せないよね」って言う方もいらっしゃいます。今、これ、授乳、パクッて、しましたね。見えまして？ ありがとうございます。これ、茨城県の、つくばエクスプレスという電車の中で、動画を撮らせていただいたのですけれども、このコンテンツを作ったのも、中小企業のプロジェクトで作らせていただいて、地方で中小企業が集まって、頑張って作った動画。この動画、割と再生回数あるのですけれども、「いいね」ばかりではないのです。なんか、6 個くらい「悪いね」があったのです。これ、なんで「悪いね」が付くのだろうかと思っっていたのですけれども、もしかして、ちょっと、見えなかったから。そういうものを期待して再生された方が、あれ？これ見えなかった。何、授乳してないじゃないって思っただから、こうだったのではないかと、代表は分析しております。

2006 年から、いろいろと評価いただきましたが、私たちこういう賞をいただくと、私たちなんかでいいのかなと思います。ただ、女性が、女性のために何かつくって、ライフスタイルを変えていこう、働くスタイルを変えていこうということを、応援いただいているのだなあと思っっています。今日はご清聴ありがとうございます。